

4. 仕事 から考える古代の暮らし

どのような仕事をしていたのかは、暮らしを考える上でとても重要です。金剛坂遺跡からは、ものづくりに欠かせない道具が出土しています。短い期間だけの集落であったことから、斎宮を拡張、造営するためのキャンプ村のようなものがあったのかもしれませんが。高床倉庫があることから、斎宮に納める品物を管理する仕事もしていたかもしれないので、今後の研究課題となっています。

また、竪穴建物6からは、まじないの記号と考えられる「ドーマン」の刻みを入れた土器が複数見つかっています。これは、現在でも海女さんが使っているまじないの記号で、魔除けの意味があります。古いも重視された古代、まじないをする人も住んでいたのかもしれませんが。

★古代の道具
ヤリガンナは、木材を削る。
紡錘車は、糸を紡ぐときに使います。



金剛坂遺跡 竪穴建物8

ドーマン刻書土器

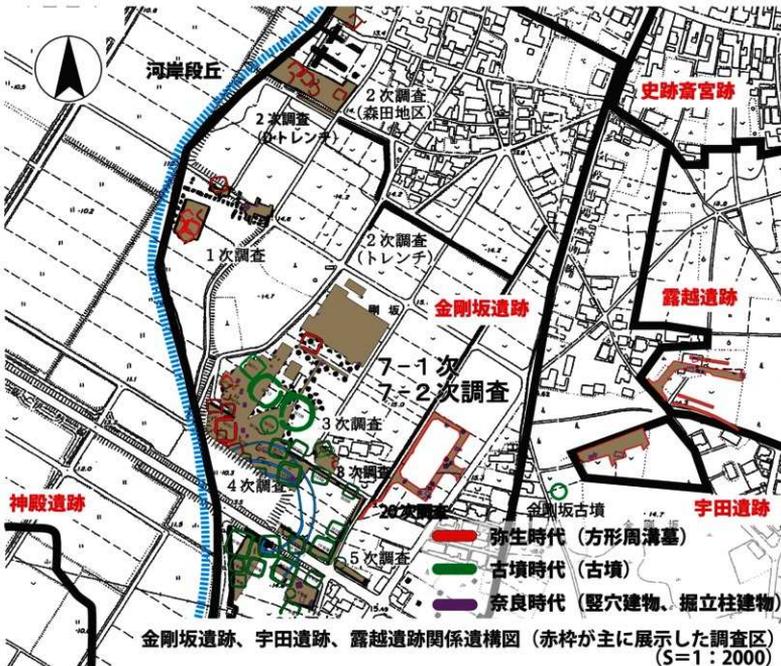


金剛坂遺跡 竪穴建物6

紡錘車 (石製)



金剛坂遺跡 竪穴建物4



この資料は、企画展「竹川、金剛坂の古代の暮らし」(令和4年7月16日～8月28日)に合わせて作成したものです。

発行 明和町斎宮跡・文化観光課(三重県多気郡明和町大字馬之上945番地) 印刷
電話:0596-52-7126/FAX:0596-52-7133/E-mail: saikuuato@town.mie-meiwa.lg.jp

明和町文化財解説シート 竹川、金剛坂の古代の暮らし

史跡斎宮跡に隣接する竹川南部、金剛坂では、近年奈良時代の集落が確認されており、斎宮跡との関係も注目されています。

今回は、令和2、3年に発掘した金剛坂遺跡、露越遺跡を中心に、古代の暮らしを考えながら、概要を紹介していきます。

1. 建物 から考える古代の暮らし

金剛坂遺跡、露越遺跡では、奈良時代後期の半地下式の竪穴建物^{たてあな}が確認されています。当時の貴族層は、すでに竪穴建物には暮らししていなかったと考えられており、柱を建てて、板壁や土壁などを作り、板張りの床か土間で暮らしていたようです。一方、庶民層は竪穴建物に住んでいたようです。

ただ、掘立柱^{ほったてりゅう}の建物も見つかっており、特に柱を9本持つ総柱建物^{そうちゅう}という高床構造の建物も確認されています。これは住居ではなく、倉庫のようなものと考えられ、高宮に関わる品物などが納められていた可能性があります。

◆方格街区整備後の斎宮再現画像



宇田遺跡 総柱建物



9本の柱を建てて床を高くし、板張りの倉庫のような建物だったと考えられます。写真では、2棟が重なっており、建て替えられています。



床は土を混ぜて叩き締めており、固い

★奈良時代の竪穴建物の特徴

- ①主な柱穴がないものが多く、構造が不明。
- ②3～4m前後の正方形または長方形で小さい。
- ③壁の一部にカマドを設置している。
- ④床を固く叩き締めて、土間のようにしている。

2. 土器 から考える古代の暮らし

竪穴建物を発掘すると、建物の床面に^{ひかめん}当時据え置いた状態のまま残っている土器があります。金剛坂遺跡では、逆に置いてある甕が竪穴建物8、12で確認され、露越遺跡では、杯^さが重なって床面に置いてあるものが確認されました。建物床面で見つかる土器は、当時の食器セットをあらわしており、当時の台所事情を知る貴重な機会になっています。

金剛坂遺跡竪穴建物8 カマド



カマドの近くの床に、逆さにして置かれていた甕で、料理に使っていたものと考えられます。

露越遺跡 竪穴建物4



★奈良時代の土器セット

- ▼炊炊き、料理用
甕、甌、鉢、カマド
- ▼盛付け、食器用
皿、杯、椀、高杯

竪穴建物の隅に置かれていた土器で、杯や甕が重なっていました。置く場所が決まっていたのでしょうか。

3. 地形 から考える古代の暮らし

★この地図から主に以下のことがわかります。

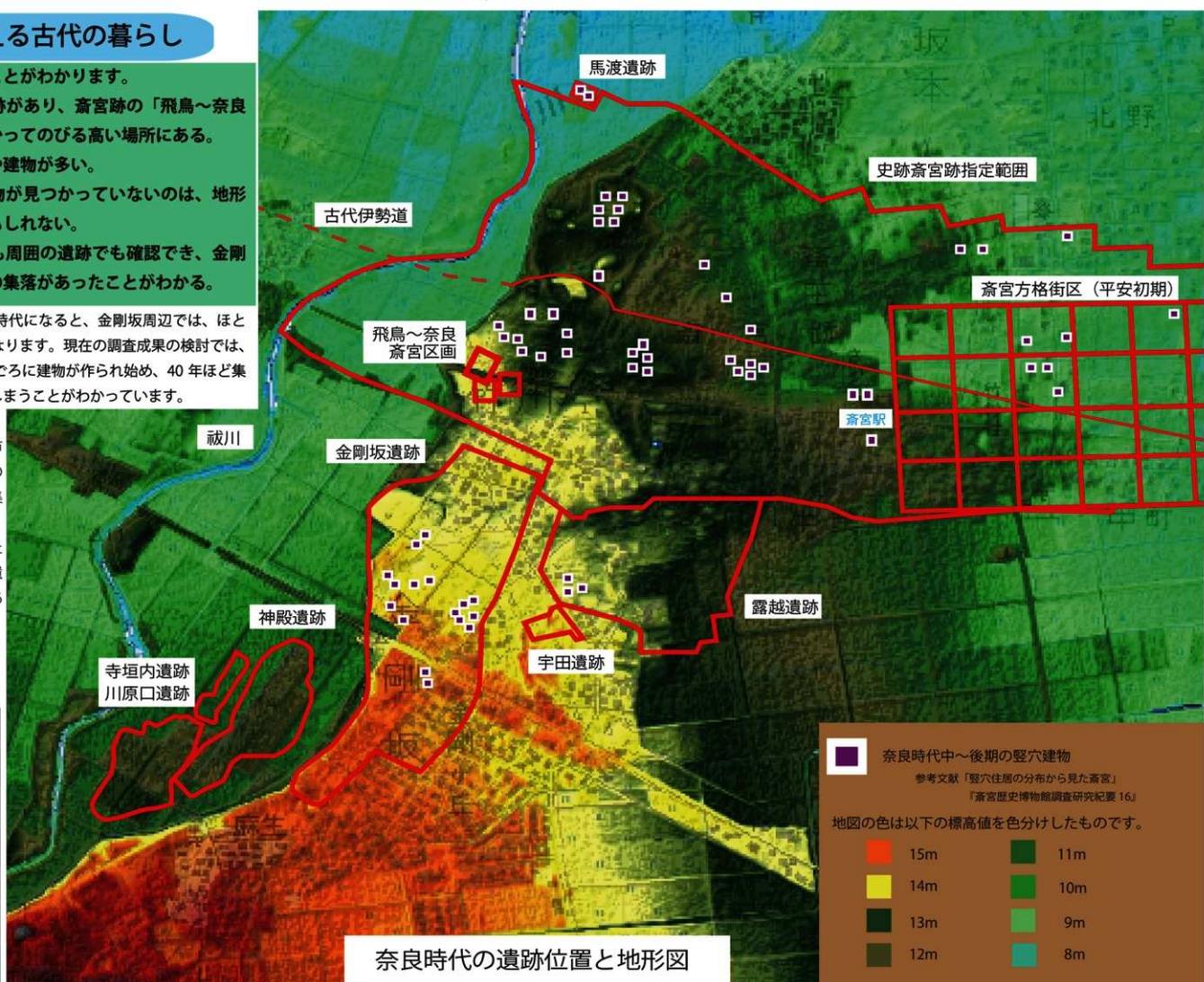
- ①標高が高いところに遺跡があり、斎宮跡の「飛鳥～奈良斎宮区画」は、北に向かってのびる高い場所にある。
- ②川の近くの高台に集落や建物が多い。
- ③露越遺跡の東側で、建物が見つかっていないのは、地形的に低いことが要因かもしれない。
- ④竪穴建物は、斎宮跡でも周囲の遺跡でも確認でき、金剛坂、宇田遺跡でも相当の集落があったことがわかる。

しかし、奈良時代の次の平安時代になると、金剛坂周辺では、ほとんど集落や建物が確認されなくなります。現在の調査成果の検討では、西暦で考えると、およそ740年ごろに建物が作られ始め、40年ほど集落が営まれた後に、なくなってしまうことがわかっています。

奈良時代後期は、斎宮の中で、**方格街区**という**暮盤**の目状の都市区画を造るという画期にあたるので、それに露越、金剛坂遺跡の集落が関係していた可能性があり、注目されます。また、川に近いため、物資流通の拠点などが神験遺跡や馬渡遺跡にあった可能性もあります。

奈良時代後期の年表と発掘調査に基づく動向

	720年ごろまでに古代伊勢道が整備されたか
天平2年	730年 斎宮の財政が神宮から自立する
	740年ごろ 金剛坂周辺で建物が多くなる
宝亀2年	771年 景行天皇が斎宮造営に派遣される
	780年ごろ 金剛坂周辺で建物がなくなる 斎宮で方格街区造営に着手か
延暦4年	785年 紀作良が斎宮長官となる



奈良時代の遺跡位置と地形図

奈良時代中～後期の竪穴建物
参考文献「竪穴住居の分布から見た斎宮」
「斎宮歴史博物館調査研究紀要16」

地図の色は以下の標高値を色分けしたものです。

 15m	 11m
 14m	 10m
 13m	 9m
 12m	 8m

国土地理院提供のメッシュ数字標高モデルを基に作成